

漢字・漢字文化を理解するための図書をご紹介します。

<読書案内・参考図書>

○中国古典・漢文

1) 吉川幸次郎『中国文学入門』

(講談社学術文庫 1976 年)

(原著は弘文堂[アテネ文庫]1951 / 清水弘文堂書房 1967)

中国文学全般について、各時代ごとに代表的な作品を解説し、それらを世界での文学の流れに位置づけて文化的意義を考察する。稀代の碩学による平易な解説書として、これまでに多くの読者をもつ。

2) 鎌田正監修・江連隆・塚田勝郎・若林力他共編『漢文名作選』

(大修館書店 1984 年～)

中国古典から章句を選び、返り点・送り仮名つきの原文と書き下し文を掲げ、それぞれに解釈・解説を施す。名言も付す。

3) 諸橋轍次『莊子物語』

(講談社学術文庫 1988 年)

(元版は 1964 年)

故事や名言を豊富にちりばめながら、中国古代思想を解説。独特の語り口で、諸橋博士が身近に感じられる 1 冊。

○漢字全般

1) 藤枝晃『文字の文化史』

(岩波書店 1971 年)

漢字が書かれた、または印刷された歴史を、ハードとソフトの面から詳細に、かつわかりやすく解説した名著。

2) 阿辻哲次・一海知義・森博達共編『何でもわかる漢字の知識百科』

(三省堂 2002 年)

文字・音韻・文学に関する種々の事項についてまとめた「百科編」と、漢字の読み方・使い方のわかる「語彙編」の二部構成。

3) 加納喜光『漢字語源語義辞典』

(東京堂出版 2014 年)

日常使用する漢字を対象に、語源(由来)と語義(意味)を徹底的に解説。

4) 沖森卓也・笹原宏之共編『漢字』(日本語ライブラリー)

(朝倉書店 2017 年)

漢字の歴史、文字としての特徴、アジアの各地域で言語に合わせた独自の発展についてそれぞれの専門家が概観する。

○中国の漢字

1) 阿辻哲次『図説漢字の歴史』

(大修館書店 1989 年)

中国での漢字の歴史を、書写材料上に記録された形を示す写真を多数掲載することでたどる。

2) 財前謙『手書きのための漢字字典』

(明治書院 2009 年)

明朝体と手書きの楷書とは大きな違いがある。手書きの規範と理論を示す。

○日本の漢字

1) 笹原宏之『日本の漢字』

(岩波新書 2006 年)

日本の漢字に関して、歴史的な変遷と多様な現状について実例を挙げて記す。

2) 安岡孝一『新しい常用漢字と人名用漢字漢字制限の歴史』

(三省堂 2011 年)

2010 年に改定された常用漢字表や人名用漢字など、漢字施策の歴史と運用の実態を解き明かす。

○日本の漢語

1) 岸田知子『漢語百題』

(大修館書店 2015 年)

中国古典を縦横に引用しながら、身近な漢語の由来や使い分けなどを平易に解く。

2) 木村秀次『身近な漢語をめぐる』

(大修館書店 2018 年)

漢和辞典編集・教育・国語施策に携わった著者による、生活に息づく漢語をめぐる考察。熟字訓や漢語オノマトペも紹介する。

○漢和辞典関連

1) 紀田順一郎編『『大漢和辞典』を読む』

(大修館書店 1986 年)

60 年以上に及ぶ編纂物語からさまざまな活用法まで、諸橋大漢和の広大な世界を知るのに最適。

2) 円満字二郎『漢和辞典に訊け!』

(ちくま新書 2008 年)

漢和辞典の使い方を説明しつつ、漢字に関する基礎知識を合わせて語る。

3) 各種漢和辞典の付録

漢字の形・音・義について詳しい解説がある。熟読して学習に活かしたい。

○『大漢和辞典』と諸橋博士関連

1) 鎌田正監修、漢学の里・諸橋轍次記念館編『諸橋轍次博士の生涯』(1992 年)

風光明眉な下田村を終生愛してやまなかった諸橋の生涯を伝える書。

2) 鎌田正『大漢和辞典と我が九十年』

(大修館書店 2001 年)

『大漢和辞典』編集作業に諸橋の片腕として初めから携わった著者の自伝。

3) 諸橋轍次『大漢和辞典デジタル版』

(大修館書店 2018 年)

親字 5 万、熟語 53 万を収録した“諸橋大漢和”待望のデジタル版。検索機能が充実。

(検定試験の出題範囲が『大漢和辞典』全体というわけではありません。)